

パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2005年9月1日発行 第24号



活躍するボランティアの方々。（吉沢忍さん、前野君、高橋君 7月15日撮影）

パラグアイ訪問記

（前号からの続き）

我々は再度中田さんと共に基地全体を見て回りました。昨夜行けなかつた奥地の道路（基地から5km先のラタイ）牧場跡の先に門扉をつけ、バイアネグラに向かつて1kmだけ道路が出来あがつては、アレマンの牧場の柵にそつてレダ側で10kmの道がブルだけ入れて作られかけて中断され、草が茂つていました。柵と整地された道路をきつと作る日がそう遠くなく来るでしょう。その時には約束通り、ブルトーナーを購入してしまつた。本来ならブルはとつくに購入してはいたはずですが、代わりに今までトラクターを具体化したいと中田さんは言つてました。本來ならブルはとつくに購入してはいたはずですが、代わりに今までトラクターを導入して整地作業を進めてきました。その間は、ブルジル人のブルを依頼して椰子の木を処理し藪を片付け、土を均してきましたが、今は彼らがブルごと帰国してしまつています。養殖場予定地では、高級魚のピンタード（市場値1kg三万ガラニー＝5\$）の養殖を是非チャレンジしました。今日もパラグアイ川でスルビ（ピンタード）が数匹釣れ、早く中田さんは語つました。今日はパラグアイ川に放し飼いされました。

これから魚の生態や餌の研究を重ねていくそうです。午前九時、我等四人（中田、三石、吉村、飯野）は、工スペランサ村上流のインディヘナ村「カトーセデマジョ」に向かい、一時間半程で着きました。そこは更に貧しく、百人程の村人の内、五十人が子供、その中の三十人が小学生です。これもかつて或るボランティ隊が建ってくれたという椰子の木の一室の校舎があり、低学年組、高学年組が背中合わせに数人ずつ授業を受けていました。独身女性の校長先生、三十代の男性先生の二人で行われていました。この夏の学校建設と青年ボランティア隊が寝泊まりする場所など、検討打ち合わせを現場で行いました。計画では教室として6m x 6mが二つで、日差しや雨を避けるため、周囲一・五mは庇を出し、床のコンクリートは周囲3mを巡らす設計です。犬が何匹もいましたが、皆やせていて、食料事情の貧しさを感じさせられました。産業は何もなく今までソーラシステム発電装置や、川の水を風車で汲み上げて各家に水を供給する装置も、かつてボランティア団体が作つて提供しましたが、壊れてい

六月十五日 今日也快晴

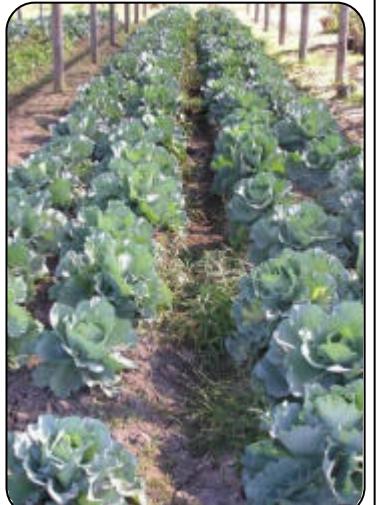
気温が三十に上がりましたが、日本の蒸し暑い猛暑と比べれば、かえつて過ごしやすいレダです。今日は土曜日ですが、ここでは六時半、労働者を集めていつも通りの仕事が始まりました。

十時から中田先生、上山先生と
今後のレダの展望について色々打
ち合わせました。継続していく為
には、一にも二にも、人材と経済
です。会員が計画的に積極的にレ
ダに来て貢献することが大切です。
プラン的には、この五年半の基地
基盤建設の段階から、生産のため
のプロジェクトを協力に推進する
段階へ移行していく必要がありま
す。農業、牧畜、林業（植樹）、
水産（養殖）、メンテナンス（電
気機械、ボート、車、トラクター、
浄水場、施設、エネルギー）の各
プロジェクトです。農業と養殖の
実験場は今、中田先生を中心など
ん整備が進められています。



農場管理をする舟見亘氏

養殖場はコンクリートは使わず、土を掘ったままの自然の状態です。どんな工夫を好み、何を与えていくのが養殖に向いているのか、水温は何度が適温なのか、どういう習性があるのかなど、まだ道に積み重ねていて研究しきりまだ地獄と云ふべき山澤があります。例えば、スルビは獲つたて食べてしまふだけではなく、その胃袋の中に何を食べているかの証拠があり、それを調べていくことも必要です。ドジョウのようなトウビラを食べる事は、餌にして釣れることからはつきりしていますが、鎧を着けたカスクードも食べていることが分りました。



今後、行動できる会員は各プロジェクトの関心のあるチームに入り、チームごとにプロジェクト推進の研究会を続け、情報を集め、時にレダに出発してそれを実践していくという計画を検討していく事にしました。

勿論、これらプロジェクト以外にも、教育、観光、建設、事業など様々な分野で真剣に取組んでいくべきことが山済みされています。

しかも中・長期計画を立てて、地域環境問題を踏まえながら、地域社会や発展途上国に貢献しつつ、我々の子供達にも希望となる、継続的に且つ発展させていくことが重要です。今後とも会員の皆様の一層の関心と実践をご協力をお願いする次第です。

(飯野貞夫「パラグアイ訪問記」より)

プロジェクトに参加を希望される会員の方は事務局に連絡してください。

南北米福地開発協会事務局
〒二二二三一〇〇〇一
神奈川県川崎市高津区
溝口三十一十五
岩崎ビル四階
電話〇四四八二九一二八二〇
ファックス〇四四八二九一二八二二
〇四四八二九一二八二〇

植樹レポート

高津啓洋報告

今後は外来種より土地本来の樹種をより多く植える。これらの方針を立てるのはつぎのような理由からです。

月四日に帰国しました。今回はモモイロイペー、チバト、ジヤカランドなどの花樹からマンゴー、アボガド、イチヂクの果樹まで申し込み本数の苗を植えつけました。

あと時間はこれまでの木の
ケアと一本一本にネーム杭を打
ち込み、写真撮影をする作業に
費やしました。

森を再生・創造する場合、混植・密植が原則です。

会員の皆さんのお木を保護しながら、森全体を永続させるため、土地本来の木を中心にできるだけ多くの種類を追加し、混植・密植の形に近づける。



今年最初に開花したモモイロイペー

これまでの樹種の植えつけは、一本ごとに大きな穴を掘り、良質の土を別の場所からトラクターで運びこむという膨大な作業量を必要とした。土地本来の木は直植え（じかうえ）ができ、乾燥に強く、継続的な水遣りも必要なし。管理コストを最小に抑えることが可能。今回の植樹行で出会った、パラグアイが世界に誇る銘木を紹介します。

その名はパロサント（スペイン語で聖なる木の意味）。成木になるのに百年、材質は濃い緑色、堅くもなくやわらかくもなく、加工に最適。



パロサントで造った時計をあしらった工芸品

しかも香木。ほんとが最も高
価な民芸品の素材として使われま
す。樹液はリウマチに効くともい
われ（すでに商品あり）、パラグ
アイでは超貴重種。

今回、自然林の構成樹を調査し
た際、植樹園西側にこの木が残つ
ていました。

しかも現地の主木の一つである
ことも判明（主木の他の二種はケ
プラツチヨとアルガロボ）。

次回からはこのパロサントの幼苗
を植樹園内に最適密度に植え込む
計画です。植樹に关心のある方
は高津地球の緑を守る会事務局長へ
(電話〇四二六一ー九一四四三)



今年最初に花を咲かせたキバナイペー(2001年4月植)